

CASE STUDY 02

アクト中食株式会社

叡啓大学

慣れた業界ほど、判断は経験則や社内の前提に寄りやすいもの。
飲食店や食品小売への卸売などを通じて地域の食の流通を支えるアクト中食は、
学生とフィールドワークを重ねることで、農家の課題と自社の役割を捉え直していききました。



農家の課題を、
自分たちの言葉で捉え直す

アクト中食が共創プログラムに参加した背景には、「農家との関係をどう築き直すか」という問題意識がありました。単に「今高く買う」だけでは持続的な関係にはならない。農家が将来にわたって農業を続ける環境づくりを、事業としてどうサポートできるのか。平岩専務をはじめとするアクト中食のチームは、大学と対話を重ねる中で、「農家の現状を理解し、どこに本質的な困りごとがあるのかを見極める」というテーマにたどり着きました。



問いを磨くと、見える事実が変わる

才崎部長が印象に残っていると話すのは、学生たちが企業側で用意した質問内容をそのまま使うのではなく、「本当に必要な情報を引き出すにはどう聞けばいいか」を考え、自分たちの言葉に整え直していたことでした。ヒアリングへ向かう途中で聞き方を練習し、質問の意図を確認し合う。こうした準備を経たフィールドワークで学生たちが気づいたのは、「農業は稼げない、しんどい」という強い負のイメージが、後継ぎ候補たちの足かせになっていることでした。本来なら工夫次第で負担を減らせるはずのノウハウや、親の農業のやり方に目を向ける前に、農業そのものを遠ざけてしまう。そんな「腰重ループ」が、担い手不足の根本にあるのではないかと考えたのです。

商売の延長では聞けない声がある

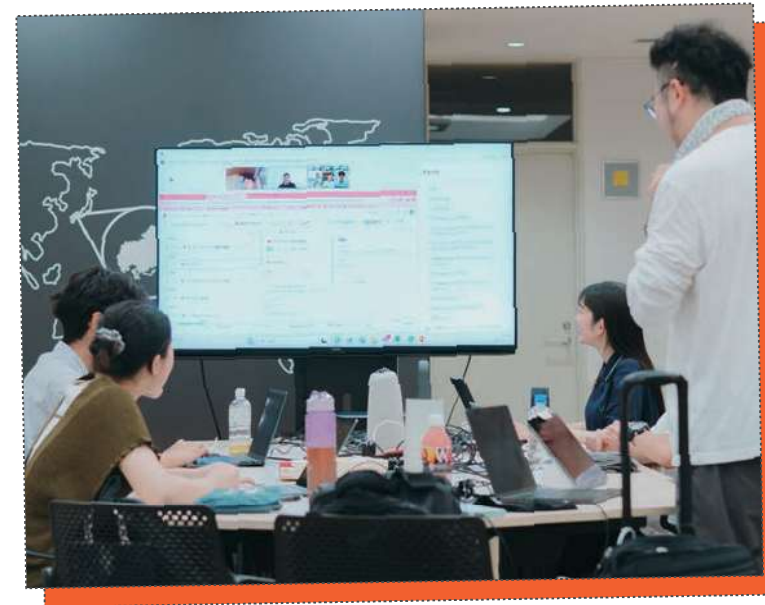
そのために行ったのが、学生とともに進めた農家へのヒアリングです。山本部長が「取引先や生産者と日頃から接していても、仕事として会う関係の中では会話が商売の文脈に収まっていた」と振り返るように、利害関係のない学生だからこそ聞けた「現場の事実」がありました。たとえば、農業は「10年続けても10回しか実験できない」というほど試行錯誤できる回数が限られること、新しい品種を広めるには販路づくりに大きな苦労が伴うこと。そうした声を聞くうちに、アクト中食にとっても「農家の課題は単純ではない」と実感する機会になったそうです。

現場の事実が、自社の役割を更新する

当初、このプロジェクトは農家の課題を整理・分析するところまでをゴールにしていました。しかし、フィールドワークを重ねる中で、学生たちから「解決策まで考えたい」という声が上がります。そこで提案されたのが、親が稲作をしている後継ぎ候補に向けたサービス案です。農地の強み、本人の希望、先輩農家の声を組み合わせ、農業へ一歩踏み出すきっかけをつくらうとするものでした。「これをどう事業にしていけるか、社内で揉んでいきたい」。学生からの提案を受けた平岩専務がそう語るほど、アクト中食にとっても、自社が農家とどう関わり直せるのかを具体的に考える材料となる提案でした。アクト中食のケースは、フィールドワークが現場の解像度を高めるだけでなく、自社の役割を捉え直す実践にもなり得ることを示す事例でした。

学生からのコメント

授業で学んだフレームワークが、実際の社会課題解決の現場でも実践的に使えることを実感できたのが大きな学びでした。企業の方と本気で議論する中で、一つの課題の裏には別の課題が潜んでいるというビジネスの難しさも痛感しました。また、チームでの取り組みを通じて、アイデアを形にする難しさや、自分の得意分野で貢献する喜びを学べたことは、今後の大きな財産になりました。



見えている課題のその先へ
フィールドワークを経て捉え直した自社の役割

PROJECT PARTNER

アクト中食株式会社 広島市西区

1911年創業。広島市西区に本社を置き、業務用総合食品・米穀・酒類の卸売を中心に、瀬戸内エリアで事業を展開。飲食店や食品小売の現場を支えるとともに、「三方よし」の理念のもと、地域の食の流通と持続的な発展を支えている。

【事業内容】業務用総合食品・米穀・全酒類の卸売、業務用食品スーパーFC本部運営および小売業
【従業員数】567名(パート・グループ従業員含む、2025年3月末時点)



対話と実践の時間

価値探索プロジェクト 企業 80時間
学生協働プロジェクト 企業 150時間 + 学生(5名) 275時間
合計 505時間

フィールドワークの成果

